2023・06・11 中村寿夫

「主は生きておられる、とは」
エリヤの生涯Ⅰ
列王記第一　17 章 1 節～24

はじめに（時代背景）

王国が北イスラエルと南ユダに分裂し、イスラエルは偶像礼拝に陥り、主に罪を犯し続け、王に対する謀反、殺戮が繰り返されます。６代目の王オムリは、サマリヤを買い取ります。その子アハブは、シドン人の王の娘イゼベルを妻にし、サマリヤにバアルの神殿を建て、アシュラ像を築きました。アハブは、それまでの王の中でも最悪と言われました。このような時代に、神によって北イスラエルに遣わされたのが預言者エリヤでした。

今朝は、エリヤの生涯から、その信仰が試され、成長していく過程を学びましょう。

中心聖句「エリヤを通して言われた主のことばのとおり、かめの粉は尽きず、つぼの油はなくならなかった」（**16**）

１　烏に、そこであなたを養うように命じた（**4**）。

（１）アハブ王への挑戦（**1**）。

エリヤが突然登場します。エリヤは「ギルアデのティシュベ人エリヤ」と紹介されています。ヨルダン川の東側の山地出身と考えられますが、詳しい説明はありません。

エリヤは、アハブに「私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。私のことばによらなければ、ここ二、三年の間は露も雨も降らないであろう」と宣言します。

エリヤは、「イスラエルの神、主に仕える者」でした。それは、エリヤが神の預言者であるという宣言でした。そしてアハブに対するこの宣言は、アハブの罪に対する神のさばきでした。

（２）わたしは烏に、そこであなたを養うように命じた（**4**）。

主は、「ヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに身を隠せ」とエリヤにお命じになりました。アハブがエリヤを殺そうとすることが分かったからです。「そして、その川の水を飲まなければならない。わたしは烏に、そこであなたを養うように命じた」と主は言われました。

これは、エリヤが「主は生きておられる」と言った通り、主が生きておられることを体験するためでした。

果たして、「幾羽かの烏が、朝になると彼のところにパンと肉とを運んで来、彼はその川から水を飲んだのです」（6）。

（３）それで、彼は、行って、主のことばの通りにした（5）。

エリヤは、「川の水を飲むのでか。烏なんて信用できません」とは言いませんでした。主のことばの通りに従ったのです。

適用：信仰とは、神を信じ、神の言われた通りに従うことです。

例話：私は、献身して牧師になると言った時、家を出ました。それは、正に「主は生きておられる」と信じたからです。ですから、親の援助をあてにすることをしませんでした。

結婚して、子どもが出来て、開拓伝道をしてどんなにお金がないときでも、「神様は養ってくださる」と信じ続けました。

２　ひとりのやもめに命じて、あなたを養うようにする（9）。

信仰の試練は、難しくなります。それによって成長するためです。

（１）それを食べて、死のうとしているのです（12）。

次ぎに、主がお命じになったのは、「さあ、シドンのツァレファテに行き、そこに住め。見よ。私は、そこのひとりのやもめに命じて、あなたを養うようにしている」でした（9）。

烏よりも安心できるように思えました。今度は「人間」ですから。でも、とんでもありません。

主のことばに従って行って見ると、やもめに会いました。彼女に「一口のパンを持ってきてください」と求めると、彼女はこう答えたのです。「あなたの神、主は生きておられます。私は焼いたパンを持っておりません。ただ、かめの中に一握りの粉と、つぼにほんの少しの油があるだけです。ご覧のとおり、二、三本のたきぎを集め、帰って行って、私と私の息子のためにそれを調理し、それを食べて死のうとしているのです」（12）。

そこにいたのは、あまりの貧しさに息子と死のうとしているやもめでした。

適用：今度の試練は、貧しく、死のうとしているやもめ家族に養ってもらうというものでした。出来るはずはない、と思えるものです。しかし、主は養うと言われました。それを信じるのが信仰です。

（２）「主が地の上に雨を降らせるまでは、そのかめの粉は尽きず、そのつぼの油はなくならない」（14）。

エリヤは、そのことばにひるみませんでした。主が「やもめに命じて、あなたを養うようにしている」と約束されたからです。

エリヤは「恐れてはいけません。行ってあなたの言ったようにしなさい。しかし、まず、私のためにそれで小さなパン菓子を作り、私のところに持って来なさい。それから後に、あなたとあなたの子どものために作りなさい」（13）。

「しかし、まず、私のために」。これは、エリヤの勝手ではありません。エリヤは、ここで、「主が生きておられること」をやもめに教えようとしたのです。まず、自分たちのためではなく、まず神様のためです。そうすれば、「粉は尽きず、油はなくならない」のです。

やもめは、「そんな馬鹿なことは出来ません」と言わずに、「エリヤのことば通りにした」のです（15）。その結果、「エリヤを通して言われた主のことばのとおり、かめの粉は尽きず、つぼの油はなくならなかった」のです（16）。

適用：これはクリスチャンの献金に適用できます。まず、自分たちのためではなく、まず神様のためにという気持ちがあれば、献金に躓くことはありません。

例話：先日脇町キリスト教会に奉仕に行ったとき、目の不自由な信徒の方に出会いました。その方が「帰りに是非、鍼とマッザージをさせてください」と言うので、していただきました。その間に、その方は、ご自分のあかしをなさいました。特に強調されたのが、神様の祝福でした。「どんなときにも、私たちは、聖書のみことば通りに、収入の十分の一を最低限にして、それ以上の献金をして来ました。鍼治療という仕事にも関わらず、神様はこの治療院兼住宅と、息子たちの家二軒を建てさせてくださいました。神様の約束に間違いがないだけでなく、大きな祝福があるのです」。その方は、何度もそれを繰り返して強調されました。

（３）この子のいのちをこの子のうちに返して（21）。

エリヤに対する信仰の試練は、なお続き、さらに難しいものになりました。この家の息子が病気になり、死んでしまったのです（17）。

やもめは「あなたは・・・私の息子を死なせるために来られたのですか」とエリヤを責めます。神の祝福にあずかったのに、次の試練で、その喜びもどこかに行ってしましました。

エリヤは、その子を屋上の部屋に抱えてあがり、主に祈ったのです。「私神、主よ。どうか、この子のいのちをこの子のうちに返してください」と（21）。主は、エリヤの祈りを聞いて、その子を生き返らせました。

適用：信仰とは、どんなときにも、ひるまずに、主を信じて祈ることです。主に不可能なことはないと信じるのです。エリヤにとって、この子の死は、烏による養い、やもめによる養いよりも難しいものだったに違いありません。

（４）今、私はあがたが神の人であり、あなたの口のことばが真実であることを知り

ました（24）。

エリヤの信仰は、ひとりのやもめを信仰に導きました。

適用：エリヤに対するこの一連の試練は、エリヤの信仰を強めるだけでなく、人を導く結果となったのです。あなたがしっかり信じていなくて、どうして、家族や人を主に導くことができるか。

例話：開拓伝道の困難があったにも関わらす、私たちの子どもたち３人が献身して伝道・牧会し、ひとりが長老として仕えているのは、神様の何よりの祝福です。

結論

エリヤは、神様に大きく用いられる前に、このような試練に会いました。それは「主は生きておられる」ことを、頭で信じるだけでなく、体験することでした。神様は、私たちの信仰を本物にし、「主が生きておられる」ことを教えるために、試練を与え、それを体験させてくださるのです。

あなたは、「烏に命じてあなたを養わせる」「やまめに命じてあなたを養わせる」と言われたら、信じて従いますか。神を信じるとは、そういうことです。いくら、頭で信じても、信じるように行動しなければ、信じたことにならないではありませんか。

エリヤの出来事を通して、あなたは、今朝、何を教えられ、何から始めますか。

聖書が私たちに求めているのは、

１　神様がおられて、求める者には必ず応えてくださると信じること。
２　自分が神様に罪を犯していることを認めるこ。
３　イエス様が私たちの罪の身代わりとなって十字架にかかり死んでくださったこと、そして復活して、生きた救い主として私を迎えてくださることを信じること。
４　イエス様を信じるだけで、自分の罪が赦され、神様の子どもとして受け入れられることを信じること。

招きのことば

イエス様は、あなたの罪を赦すために、十字架におかかりになりました。あなたの罪を赦し、あなたが天国に行けるようになってほしいのです。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」